『からすうり』

本田　眞樹子

秋

藪や荒れ地　背の高い木に蔓をからませ
スペード型のギザギザの入った葉と
燈色の楕円（卵より小さい）の実が
間隔をあけ　ぶら下げている
実に美しい
この実の中の種をきれいに洗い
小箱の中に柔らかい布を敷き
大事にしていた
種が『大黒様』になるのだと教えた姉
信じていた　大昔の子供のときの事

夏

夜八時頃から　少しずつ少しずつ
蝶が羽化するごとく
畳んでいた花びらを　広げていく
深夜　思いっきり両腕を伸ばし、
両手いっぱい広げるように
花火びらは前回　純白のレース
日の出には、レースの花は影も形もなく
すぼんだ朝顔の花跡のような物が残る
からす瓜を知っていても、
花をご存知の方は幾人おられるだろう

社会においても然り
自然界のことも
知らないことばかり・・・・
だが、生きてこられた
被造物は、すべて
神様からの贈り物　感謝